

酒田出身の哲学者、伊藤吉之助の事績

土岐田 正勝

1. はじめに

Philosophia (哲学) の“philo”は「愛」、「sophia」は「知」という意味であり、哲学とは本来知識を愛し教養を求めることで、学問一般を意味した。日本語への訳者は西周(にしあまね)で、賢哲が明智を希求するという意味から「希哲学」、さらに「哲学」と訳したことに始まる。この場合の「哲学」とは、古代ギリシアに発する西洋流の「学問としての哲学」、「西洋哲学」を意味している。

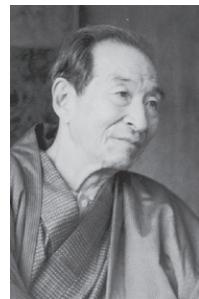
明治維新以後、福沢諭吉や中江兆民らによって西洋近代思想の導入がすすめられ、それらは日本人の思考構築に、少なからぬ影響を与えた。やがて明治政府は帝政ドイツを模範とした天皇制国家主義の体制を整え、これが学問・哲学の世界では、ドイツ観念論的形而上学(超感覚的な世界を真実の实在と考え、これを純粋な思考によって認識しようとする学問)の受容や、カント・ヘーゲル研究の隆盛となっていった。

奇しくも明治10年代(1877～)にこの庄内に生まれて哲学を志し、その道を究めようと上京、後に全国的にも著名な哲学者が3人も当地から誕生したことは、特筆すべきことである。一人は東田川郡本郷村(現鶴岡市本郷)出身の宮本和吉(明治16・6・16～昭和47・10・22、1883～1972)で、『哲学大辞典』(岩波書店)の編集や、波多野精一との共訳『オイケンの新理想主義』、『哲学概論』、『カント研究』などの著書がある。彼は武蔵大学や成城大学の学長を務めた。二人目は宮本和吉より2カ月遅れて飽海郡上郷村山寺(松山町を経て、現酒田市山寺)に生まれた阿部次郎(明治16・8・27～昭和34・10・20、1883～1959)である。彼は夏目漱石門下生として文芸・哲学の評論を執筆、中でも『三太郎の日記』はベストセラーになった。阿部次郎は人格主義を唱えるとともに、美学論を究めた。彼は東北帝国大学、慶応大学、日本女子大学で教授を務めた。『阿部次郎全集』(全17巻)がある。

三人目は阿部次郎より1年半遅れて酒田町上台町（現酒田市）に生まれた伊藤吉之助（明治18・1・4～昭和36・7・7、1885～1961）である。彼はカントやヘーゲルについて考究するとともに、『哲学小辞典』（岩波書店）・『最近のドイツ哲学』などの他、数々の論文を著わした。また、加藤弘之哲学会会頭のもとで、宮本和吉とともに『哲学雑誌』の編集に携わっていたことも明らかになった。彼は第二次世界大戦後、哲学会会長や日本哲学会委員長の重責を務めた。世界が東西両陣営に分裂して危機感を増し、バートランド・ラッセル・アインシュタイン宣言が発せられた1955年（昭和30）頃、日本の哲学界を代表して、『世界平和』と題した論文を発信している。

以上の3人、すなわち宮本和吉・阿部次郎・伊藤吉之助を「庄内が生んだ哲学三羽鳥」と称しているが、彼等より12、3年前に生まれて少なからぬ影響を与えた人物に、鶴岡町高畑町出身の文学者で哲学者でもある高山樗牛（明治4・1・10～同35・12・24、1871～1902）がいる。彼は明治29年（1896）東京帝国大学文科大学哲学科を卒業、在学中に執筆した歴史小説「滝口入道」が『読売新聞』の懸賞に入選して、一躍脚光を浴びた。高山は『帝国文学』や『太陽』の編集を担当、日本主義を標榜した。

上記3人の中で、特に樗牛の影響を大きく受けた人物は、伊藤吉之助であった。



伊藤吉之助 73歳頃
（筆者撮影）

2. 哲学を志す

酒田出身の哲学者伊藤吉之助は、明治18年（1885）1月4日、酒田町上台町に父惣太郎、母美代の長男として生まれた。生家は雑貨商であった。彼は明治36年（1903）、荘内中学校（現鶴岡南高校の前身）を卒業するが、ちょうど中学3年の頃、啓蒙的な思想運動を展開していた「丁西（ていゆう）倫理会」主催による公開講演会集録『倫理講演集』が出版されており、荘内中学で同級であった小倉金之助たちと、清新な気持ちでこの講演集に飛びついていった。この『倫理講演集』の冒頭には、後に伊藤吉之助の恩師となる東京帝国大学教授・桑木巖翼（げんよく）の、「健全なる思想とは何ぞや」が掲載されていた。

伊藤吉之助の思想形成に大きな影響を与えていく丁酉倫理会は、明治33年(1900)から、これまでの同人相互の研究や討議を主としていく杵を越えて、社会的運動・啓蒙的運動に力を入れるようになっていった。その活動の背景には、例えば日本弘道会による国民道徳の振興をめざす保守的な色彩の濃い運動に対抗するものがあったし、やがて迎える新しい世紀への待望や世界文化への強い関心を背景として、道徳・社会・文化の諸問題に寄与しようという進歩的な運動であった。この頃、庄内出身の思想家であり文学者であった高山樗牛も丁酉倫理会に加入しており、中学生の伊藤吉之助に、中央で活躍している樗牛が与えた影響は少なくなかった。

明治36年(1903)、伊藤吉之助は第一高等学校(東大教養学部の前身)に入学、同校を39年に卒業した。そして同年、東京帝国大学文科大学哲学科に入学し、井上哲次郎・桑木巖翼らに学びながら、生涯にわたって哲学の道をいそしむ方向づけがなされていった。当時、東京帝国大学(以下、東大と記す)哲学科には、郷土出身の前記2名が在学しており、さらに同大学理科大学選科には、庄内中学時代に同級であった酒田町船場町出身の小倉金之助が在学中で、同郷のよしみで互いに親交を深めていた。

伊藤吉之助が阿部次郎に宛てた書簡の一部は、次郎の三女で作家である大平千枝子氏(故人)が所蔵されているが、その中には伊藤が阿部次郎に講演を依頼している内容のものや、伊藤の結婚披露宴案内状なども含まれている。阿部次郎の広範な交友関係も手伝って、伊藤吉之助と夏目漱石との出会いと交流があったことは、特筆されなければならない。伊藤吉之助は夏目漱石等と、東京音楽学校(現東京芸術大学音楽学部)主催による春秋2回の定期公開演奏会を、常連としてしばしば聴きに行った。

明治42年(1909)、伊藤吉之助は東大哲学科を卒業した。卒業論文は「カントを中心とした空間論」であり、この頃から抱き続けたドイツ哲学への憧憬が、そのまま彼のライフワークであるドイツ哲学考究への源となっていった。哲学科卒業後、直ちに大学院に進み、5年間在籍した。

明治44年(1911)より東大哲学科副手を嘱託され、『哲学雑誌』の編集に従事した。同45年(大正元年)、『哲学雑誌』は300号という記念すべき発行回数を迎えたが、この記念号の編集を、庄内出身の伊藤吉之助と宮本和吉の二

人で担当していることは、驚きであり、特筆されなければならない。

3. 「哲学会」、『哲学雑誌』と伊藤吉之助

当地には、これまで哲学研究団体組織の一つであった「哲学会」や「日本哲学会」、あるいはそれらの研究発表機関誌である『哲学雑誌』や『哲学』と伊藤吉之助が、どのように関わっていたかについて記述された文献はなかった。そもそも伊藤吉之助自身、自らのことを他人に語ることの少なかった人物である。

今から半世紀前のこと、私が伊藤吉之助氏と遠い親戚筋に当たっていたことから、東京での学生時代に、在学中の保証人を引き受けていただいた経緯がある。私は在京字、しばしば新宿京王線の幡ヶ谷駅近くにあった代々木西原町の氏の居宅を訪ねては、庭掃除を手伝ったりした。氏から国技館の大相撲見物に連れて行って貰ったこともあった。頃は後に横綱になった東田川郡櫛引出身の柏戸が、“富樫”の四股名で十両優勝した年であった。

哲学には全く疎い私ではあるが、『哲学雑誌』等を繙くことによって、伊藤吉之助と日本の哲学界との関わりの一部が、やや明らかになってきた。

日本の本格的な哲学の学会である「哲学会」は、明治17年(1884)1月26日、新進少壮の学士、井上圓了・井上哲次郎・有賀長雄・三宅雄二郎(雪嶺)・棚橋一郎らが発起人となり、これに先輩の加藤弘之(東大初代総理)・西周(あまね)・西村茂樹・外山正一(まさかず)等から意見を求めて、29名の会員のもとに発足した。その構成員は、当初、



田辺 元	宮本 和吉	阿部 次郎	波多野婦人	田中経太郎	小山 新繪
明治 43 年春分		伊藤吉之助	波多野精一	安倍 能成	

阿部次郎・宮本和吉・伊藤吉之助をはじめ、近現代日本哲学界の重鎮たちが写っている貴重な写真。
(酒田市立光丘文庫所蔵)

東京帝国大学哲学科関係者を中心にしていたが、やがて各大学の既存哲学会の

会員が、メンバーとして加入してきた。

2年後の明治19年（1886）2月、「哲学会」の会長（会頭）に加藤弘之、副会長に外山正一が選出された。ちなみに、この時から61年後の昭和22年（1947）、この「哲学会」の会長ポストに、酒田市出身の伊藤吉之助が就任するのである。

哲学会創設の中心人物・井上圓了は、「哲学の必要を論じて本会の沿革に及ぶ」と題して、哲学会結成の趣旨と外国の学問研究との共生について、おおよそ次のように述べている。

「……欧州の政治・法律・理学・工学進歩のゆえんは、その原理原則を論究する哲学が振興していることによる。互いに競って哲学を講究し、その結果を世間に応用して文明を進展させており、社会に益するところが大きいからである。日本の実情をこれと比較すると、哲学を講究する者がいないばかりでなく、世間に無益の学問であると唱える者が多いからである。これでは日本国家の文明を振起することはできない。ことに東洋には西洋人が未だ研究していない固有の哲学が存在するのであり、この東洋のすぐれた哲学と西洋のそれを合わせて、一つの研究組織を創設することができたならば、日本にとって、それは非常に栄誉なことである。よってそれぞれの学者が、いつまでも因循（旧態依然）として対応策を講じない訳にはいかないのである。」

哲学会の研究誌・『哲学会雑誌』第一号は、哲学会発足から3年後の明治20年（1887）2月5日発刊されたが、加藤弘之会頭（会長）は発行の主旨について、巻頭で次のように述べている。

「我哲学会は、その創始既に3年前にありたれども、従来は毎月一回、会員相会して演説をなすのみにして、未だ雑誌を発行するの挙、あらざりしが、今般、本会の議定により、自今毎月雑誌を刊行して、毎会の演説は勿論、その他、会員諸氏の論説、又は欧米哲学者の新説等を掲載して、これを会員に頒布し、併せて世上にも公示することゝなせり。

我邦に至りては、前述の如く今般初めて一個の哲学雑誌を発行するを得る

に至りたる程の幼稚なる状態なれば、各派共その学会を設立して相競争する如きは、もとより思いもよらぬ事と云わざるべからず。是を以て今日に於ては、印度哲学者も支那哲学者も西洋哲学者も、皆相合してこの一哲学会を組織して、その中について相互に研究するを以て足れりとせざるを得ざるなり。……（以下 略）」

なお『哲学会雑誌』というタイトルは、明治25年（1892）6月発行の第64号より、『哲学雑誌』と改められた。

4. 『哲学雑誌 300号記念』特集号を編集

27歳の伊藤吉之助が東大哲学科の副手を勤めていた明治45年（大正元年1912）、『哲学雑誌』は300号（第27巻）記念誌を発行した。その奥付には、加藤弘之会頭以下の哲学会役員名が記されている。驚いたことは、『哲学雑誌 参百号記念』と銘打った特集号の編集を、庄内出身の若き哲学者・伊藤吉之助と宮本和吉の2名が担当していることである。なお伊藤の肩書は、文学士・東京帝国大学文科大学哲学研究室内となっている。

記念号【論説の部】には、(1)加藤弘之の「余の科学及び哲学の定義」、(2)井上圓了の「倫理の門内に向上の一路を開け」、(3)桑木巖翼の「一と多」、(4)西田幾多郎の「法則」、(5)井上哲次郎の「生命に伴う五種の特徴」等、13本の論稿をはじめ、【雑録の部】には伊藤吉之助の「哲学会史料（上）」、宮本和吉の「思潮評論」、大島正徳の「定義に関する米国哲学会委員の報告」、吉田熊次の「第二回万国道德教育会議」等が掲載されている。

伊藤吉之助著述の「哲学会史料（上）」は、4万字を超える長文である。その冒頭部分は、次の通りである。

「旧い文明を破壊して、新しい文明を移入するために全力を尽くした啓蒙学者の痛烈な運動が、国民の思想と生活の上に凄まじく反響しはじめたのは、ほとんど維新の大変革と同時であったと云ってよからう。“西洋事情”や“西洋旅行案内”や“世界国尽し”などは、かつては夢にも知らなかった新し

い事実に満ちた新しい世界を彼等の前に展開した。又、“学問のすゝめ”や“自由の理”や“窮理図解”等は、これまでの儒者・和学者が、遂に教えてくれなかった[人間普通 日用に近い実学]のあることや、これまで耳にしたこともない自由民主とか自然の法則とか云う、物珍しい思想を教えてくれた。こうして、ほとんど順応に暇ないほど一時に押し寄せて来たこれらの刺激は彼等を眩惑させ、驚嘆させ、憧憬させて、“文明開化”のモットーの下に、世は西洋崇拜、欧化主義の全盛をみるようになり、社会の改良が学者先覚の重大な任務とされるようになったのは、自然の大勢である。(中略)実利・実学・自由・民主と云うような特徴をもった、この啓蒙時代の哲学が、その内容の功利的・実証的であったのも、甚だ自然と云わなければならぬ。ただ、その内容ばかりでなく、哲学の攻究そのものも、又、実用的・社会的の目的をもっていた。Nutzlichkeit(功利・効用・実用)が、その唯一の目的であった。それ故に学者が“哲学の必要”を説くにも、先ず、努めて[哲学の世間に及ぼす効用]を教えようとした。而して当時、主として行なわれた外国語は、最も実用的だと云われる英語であって、従ってその行なわれた功利的・実証的の哲学と云うのは、即ち主としてミル・ベンサム・スペンサー等の哲学であった。就中、広く流布したものは、ミル・スペンサー等の著述でしかも、最も多く読まれたものが、経済・社会・政治等に関するものであったことは、当時の社会の趨勢から考えて、如何にもそうありそうな事である。もとより倫理・論理・心理・宗教・教育等に関するものも読まれたが、純粹の哲学に関するものは、あまり読まれなかった。…(略)…」

そして最後に、「…哲学会は、今やその会員700名を越えている。心理学・美学・印度宗教学・社会学・教育学・倫理学等、皆それぞれ特殊の研究會をもつ様になった。……(以下 略)」と、結んでいる。(『哲学雑誌 300号記念』所載、「哲学会史料 上」)。

「哲学会史料(上)」には、哲学会が発足した明治17年(1884)1月26日以降、同30年(1897)までの、哲学会例会の年度別記録や研究発表・論説が記録されており、我が国の哲学界の動向を探る上で、極めて貴重な資料になっている。

例えば夏目金之助（漱石）が明治24年（1891）から同26年まで、『哲学雑誌』の編纂委員として活躍し、同26年には、同誌に「英国詩人の天地山川に対する観念」と題して寄稿していることは、特筆されなければならない。また、京都に哲学会が発足したのは、同33年（1900）である、と記している。

参考までに、「哲学会史料（上）」に登場する人物名の一部を記すと、次の通りである。

中村正直、西 周、西村茂樹、外山正一、井上哲次郎、嘉納治五郎、小崎弘道、原 坦山、日高真実、坪井九馬三、南条文雄、鳥尾小彌太、岡田良平、上田萬年、白鳥庫吉、村上专精、大西 祝、三上参次、西田幾多郎、元良勇次郎、中島力造、芳賀矢一、田中館愛橘、姉崎正治、桑木巖翼、高山林次郎（樗牛）、波多野精一、藤井健次郎、夏目金之助（漱石）、フェノロサ、ノックス、プッセ、ケーベル、他

5. 岩波『哲学小辞典』の編者に

東大哲学科の副手となってから4年後の大正4年（1915）4月3日、満30歳になった伊藤吉之助は、仙台藩士族の後裔と云われる高橋てる19歳と結婚した。媒酌人はインド哲学者の常磐大定夫妻で、司会を先輩の宮本和吉が担当した。来賓に井上哲次郎や桑木巖翼、阿部次郎等がいた。吉之助が妻へ最初に注文したことの一つは、貧乏に耐えてほしいということであった。その手始めは、新婚旅行の費用が全て本代に変わったことであった。

大正6年（1917）、彼は慶応義塾大学予科教員となった。

同9年（1920）4月、慶応大学派遣留学生としてドイツに留学、ベルリン大学哲学科へ入学した。翌10年5月にはハンブルク大学哲学科へ、さらに同10年10月にはフライブルク大学哲学科へ入学した。ドイツ留学中は、後に実存哲学の代表的存在となるマルチン・ハイデッガーが、家庭教師を努めてくれたと云われている。留学中はドイツ哲学の研鑽に努め、特にこの頃隆盛をきわめていたマールブルク学派（新カント学派）の論理・概念追究の学風を身につけた。翌11年7月、フライブルク大学を退学、帰国した。

大正11年（1922）11月、彼は慶応義塾大学文学部教授となった。翌12年

3月東大文学部哲学科講師を嘱託され、「哲学」及び「哲学史第二講座」（現代哲学）を担当した。

大正15年（昭和元、1926）東大文学部助教授、昭和5年（1930）同大学教授に就任した。以来、昭和20年（1945）に退官するまでの19年間、東京大学で教鞭をとっている。昭和17年12月、東京帝国大学発行の同大学『学術大観 総説 文学部』による教授陣紹介欄には、伊藤吉之助教授について「……独自の組織的立場より哲学概論、西洋哲学史（近世）、現代哲学、19世紀哲学等を講じ、その厳密犀利なる学風は、演習・講義を通じて学生に多大の感化陶冶を与えている。峻厳なる自己批判によって、絶えず自己の体系を更新して、未だ著書を成すに至らぬが、その講義は常に新鮮澁刺として、聴講者の自発的思索を刺激すること甚大である。岩波『哲学小辞典』（昭和5年）を編集、発表論文数篇がある。」と、記している。

岩波『哲学小辞典』は昭和5年（1930）3月20日、平易な哲学用語の解説を第一目標として、伊藤吉之助を編集責任者として刊行された。収容科目は、哲学・哲学史・認識論・論理学・倫理学・心理学（実験・民族・変態各心理学）・精神技術学・美学・芸術学・教育学・言語学・社会哲学・社会学・社会思想史・宗教哲学・宗教学・キリスト教神学・キリスト教史・ギリシャ：ローマ神話学・法律哲学・法律学・経済哲学・経済学・政治哲学・政治学・数理哲学・数学・天文学・物理学・化学・地質学・生物学・生理学・精神病学等、広範囲に及んでいる。従って、項目執筆者は50名を超えており、そのメンバーは、当時における各分野のスペシャリスト等であった。例えば小泉信三・橋田邦彦・波多野完治・林 達夫・日高四郎・石原 謙・城戸幡太郎・三木 清・谷川徹三・富永惣一・戸板 潤・清水幾太郎・阿部余四男・石原 純・宇野圓空等が、執筆を担当している。なお阿部次郎は、美学及び芸術学分野の校閲を担当、和辻哲郎は項目選定に協力している。

この頃から伊藤吉之助は、日本哲学界における第一人者としての地位を占めるようになった。岩波『哲学小辞典』は好評で、第二次世界大戦後も増刷され1953年（昭和28）第10刷を数えている。すなわち日本の名著の一つとなり、後世に彼の名を残すこととなった。彼は生前、この辞典の編集・執筆に、膨大な時間を費やすことになったと、私に語ってくれた。

6. その学風

1935年（昭和10）、彼の恩師であった哲学科主任教授の桑本厳翼が退官したため、桑木の後任として伊藤吉之助が同科主任教授に昇任し、西田幾多郎や田邊元を擁する京都帝国大学哲学科に伍して、彼が東大哲学科を切り盛りしていくことになった。

伊藤はドイツ近・現代哲学を専攻しており、特に現象学に移りつつあった時代を反映して、ボルツァーノの命題自体の研究や、布伦ターノの志向性の原理など、その思想の矛盾、すなわちアポリアを鋭く指摘するという講義を展開した（『近代日本哲学思想家辞典』）。

彼のゼミの特色は、一時間一時間が真剣勝負そのものであり、彼のロゴス（logos、理性・教説・学術・言葉）追求の学風は、学生達に厳しい先生という印象を与えた。

彼は、あれこれ研究書を読むよりも、カントならカントとともに、ヘーゲルならヘーゲルとともに考えることが、何よりも大切であると論じ、まずは古典をしっかり身につけよと教えた。

彼は、20世紀の新しい哲学をとりあげては、その思想の矛盾や行き詰まり（アポリア・矛盾）を鋭く指摘し、真理や存在そのものは認識したり語り得ないものであるという立場をとった。したがって、彼の著述は極端に少ないし、彼自身、博士になることはなかった。しかしよく知られているように、長い間、彼は博士論文の審査に携わってきたのである。

7. 『最近の独逸哲学』

数少ない伊藤吉之助の著述書の中では、『最近の独逸哲学』（236頁）が主要著書の部類に入る。この本は彼の数篇の論稿を一冊の本にまとめたものであり、言論統制が極端に厳しかった第二次世界大戦中の1944年（昭和19）8月、理想社から3円20銭で出版されている。

その内容は、ドイツ哲学とナチス哲学者のこと、ナチスの世界観のこと、ナチスの生命哲学論や人種的民族的生命圏のこと、ドイツ哲学の本流であるヘー

ゲルやニーチェ・ゲーテ・シェリング等との思惟の差異などについて言及したものである。そしてナチス（国家社会主義ドイツ労働者党、反ユダヤ主義・反マルクス主義・反民主主義・大ドイツ主義を唱えたファシズム政党）を婉曲に批判し、ナチス主義の哲学体系は、ドイツ論理学の真の完成をまって、はじめて我々の批判の対象になると結論付けている。すなわち精神と生命の二つの哲学の対峙が現代ドイツ哲学の特徴であり、「ナチス生命観」存立の由縁を述べている。そしてそれは実践的・行動的であり、ドイツにおける思想の動向が、世界に大きな影響を与えてきていると指摘している。

参考までに、『最近の独逸哲学』収載論稿名と執筆年月は、次の通りである。

- | | |
|------------------|----------------|
| (1)「現代ドイツ哲学への序曲」 | 1944（昭和19）年 2月 |
| (2)「現代ドイツ哲学の動向」 | 1940（同 15）年 8月 |
| (3)「根源的現実」 | 1943（同 18）年 3月 |
| (4)「ナチス哲学者とヘーゲル」 | 1940（同 15）年 9月 |
| (5)「ドイツ論理学」 | 1939（同 14）年 9月 |

附 篇

- | | |
|---------------|----------------|
| (1)「論理主義」 | 1927（昭和 2）年11月 |
| (2)「哲学会史料 序説」 | 1912（明治45）年 2月 |

8. 北海道大学法文学部を創設

1945年（昭和20）10月3日、61歳の伊藤吉之助は、東京帝国大学を退官した。

この頃、北の北海道帝国大学（以下、北大）では、内村鑑三や新渡部稲造、有島武郎らを育んだ札幌農学校の伝統的精神を、北大に哲学科を中心とする法文学部を設置することによって伝承・伸展させようという方針が、伊藤誠也北大総長を中心にして打ち出されていた。同じ頃、九州帝国大学では法文学部の分離独立、名古屋帝国大学では法経学部の設置、東北帝国大学では農学部の設置計画が進められていた。

1946年（昭和21）8月、北大法文学部創設準備委員として、学外からは桑木巖翼と伊藤吉之助が任命され、講座編成や教官人事を委嘱された。

同年9月に北大法文学部創設期成会の設立総会が開かれ、会長には北海道長官・増田甲子七（かねしち）が選ばれた。さらに期成会設立趣意書や宣言、並びに期成会規約と寄付金募集が決議された。募金額目標500万円の内訳は、図書費300万円、予科移転費200万円であった。

「北大法文学部設立趣意書」は、歴史的経過を踏まえた学部創設への切々たる情熱が脈うっており、感動を与える文章である。今日の北海道が、その繁栄を築いた基盤の一つに、当時の関係者のなみなみならぬ決意と情熱をあげることができる。設立趣意書の前半は、次の通りである。

「……北海道帝国大学が総合大学であるに拘らず、法文学部を欠如し、本道民子弟の教育上、極めて遺憾なるものあることは多言を俟たない所であって、三百有余万道民が、久しきに亙って其の併設を要望し来った所以も、亦、此処に存する所である。

由来、本道は開拓後日浅く、為に、政府施策の根幹には、其の拓地植民を偏重する傾向があり、従って、本道の実情に浅い国民をして、今尚教育文化の面に於いて本道を軽侮蔑視せしめ、一部道民すら之を甘受するものがあったことは、道内に対する文化施設を軽んじた跛行的政策の結果であると思考せざるを得ない。而して、此の跛行的政策の一端を示すものに、本道高等教育機関の文科系軽視の遺憾事がある。……………（略）……………」

文部省は1946年10月、北大法文学部の設置を省議で承認した。設置学科は哲学科・史学科・文学科・法律学科・政治学科・経済学科の6学科であった。

ところで法文学部創設準備委員の中でも重鎮の一人として活躍を期待されていた桑木巖翼が、同1946年12月に急逝したため、桑木に代わって伊藤吉之助が法文学部創設の重責を担うことになった経緯がある。そして新たに、法政大学の杉之原舜一を準備委員に加え、学部創設までの間、人材や資金獲得のために奔走することになった。

1947年（昭和22）6月、初代法文学部長に伊藤吉之助が任命された。法文学部開講式は同年9月1日、北大中央講堂で挙行された。伊藤学部長は、次のような内容の訓示を開講式で述べた。

「開講にあたり強く諸君に望むことは、大学の理念の自覚である。大学は最高学府として、どこまでも学問研究が中心である。真理の探究と、学問の発展に貢献することが使命である。現在の日本は、大学そのものの運営や組織が、新しい“大学令”のもとに改変され、その上、諸君の生活も学への専念を許されない時でもあるが、この大学の理念は、少しも変らぬことを忘れてはいけない。私は今、ヘーゲルが1818年（文政元年）10月22日、ハイデルベルヒからベルリンに来て、数人の学生を相手に放った言葉を思い出す。それは【学に対する信頼、真理に対する信念、自己自身に対する畏敬の念を忘れるな】、ということであった。学の体得は人間自身であり、自己に対する信頼と畏敬の獲得が、最後のものであることを自覚すべきである。戦後、大学は色々な意味でその権威を失墜しているかの感を抱かせるが、学園の封建制は、学徒が真理探究への勇気を失い、教えられるものを受けただけで終わることによってそれを助長する。文化国家への貢献と、本道文化の理念化のためにかけられた諸君の使命の重要性を自覚して、大いに勉学されんことを望む。」（『北海道大学新聞』1947年・昭和22年9月2日号）

北大法文学部は年来の基本構想を土台にして、稀にみるスピード誕生を達成することになった。このことは北大創設以来、文系学部開設を希求する北海道民全体の渴望が、その基盤をなしていたと考えられる。法文学部のスタッフには中国文学の武田泰淳、酒田出身の哲学者斎藤信治、西洋哲学の細谷貞雄、倫理学の須田豊太郎等が新たに加わり、陣容を整えた。

法文学部は開講はしたものの、終戦後の進駐軍撤去後のことであり、北大の校舎は荒廃していた。電線はひきちぎられ、窓ガラスは壊れたままであった。それをベニヤ板で間に合わせて、継ぎはぎの電線とハダカ電球で補うという状態であった。研究室には、ただ一台のテーブルと椅子が一脚あるだけで、一冊の図書もなく、その図書を購入するための資金は、これから寄付金を募って賄うという状況にあった。当初の計画では図書費と設備費の合計額500万円を、寄付金で賄うことにしていた。しかし第二次大戦後のインフレ抑制を目的とした金融緊急措置令（新円切り替えなど）や、5倍にも達する急激な物価上昇に

遭遇し、計画の500万円ではどうにもならず、新しい募金目標2,000万円を設定し、それに向かって、募金運動を展開した。伊藤吉之助が希求する“北方のアテネ”をつくるために、2日講義しては1日寄付金募集に出掛けるという苦闘が展開された。

1949年（昭和24）法文学部は完成年度を迎え、翌50年3月には、第一回卒業生を世に送った。同50年、北海道大学法文学部は文学部と法経学部とに分かれ、初代文学部長に伊藤吉之助が任じられた。

1951年（昭和26）7月、伊藤は北大を退官し、4年余の札幌生活に別れをつげた。この年の9月、彼に北大名誉教授の称号が与えられた。同51年、中央大学文学部哲学科教授に迎えられ、55年（昭和30）には、同大学の文学部長に就任した。

1955年9月、伊藤は北海道大学創立80周年記念式典、並びに法文学部創設10周年記念式典に招かれ、札幌を再訪した。同地に5日間滞在したが、最終日は同僚数名と石狩川河畔で一時を過ごした。この日は冬の近い北国には珍しい小春日和であった。空にはうす雲が二、三片浮かび、庭には咲き残ったダリア・コスモスの上を、赤とんぼがしきりに飛び交っていた。それはちょう度、所は変われ、彼が初めて来道した時の洞爺湖における晩秋の一日と同じようであった。この光景を前にして詠んだ句が、

“雲あわく 石狩平野 とんぼとぶ”

である。

この一句に、彼の札幌時代の感慨が凝集されている感がある。

9. 哲学会会長、日本哲学会委員長として

前述のように1916年（大正5）2月、哲学会会長は加藤弘之から井上哲次郎に代わった。さらにそれから30年の星霜を経た1947年（昭和22）、桑木巖翼哲学会会長の後を引き継いで、伊藤吉之助が哲学会の会長に推挙された。そして1953年（昭和28）から55年（同30）にかけては、全国組織の「日本哲

学会」委員長に選出され、東西間の緊張が続く世界情勢の中で、日本の立場から「世界平和」について提言した。

ふり返れば第二次世界大戦後の混乱期を乗り越えた1949年（昭和24）頃、哲学研究者間に相互啓発・研鑽のための研究機関を持ちたいという要望が、関係者に深まっていた。そしてついに、現存の各哲学会や哲学研究機関の伝統・立場をそのまま認めた上で、哲学の研究を専門とする者を包括した全国的な哲学会を設立し、やがて予想される海外哲学界との連携並びに交渉に際して、日本の哲学界を代表できるような組織を創設することになった。この呼びかけは、天野貞祐（後に文部大臣）・出隆（いでたかし）等を中心に行なわれた。発起人には庄内出身の伊藤吉之助や宮本和吉をはじめ、安倍能成・石原謙・栗田賢三・桂寿一・高桑純夫・武田信一・田中美知太郎・谷川徹三・林達夫・速水敬二・務台理作・和辻哲郎・山崎正一等、50人が名を連ねている。

1949年（昭和24）10月2日、84名の賛同者出席のもとに、東京上野公園内の学士院講堂で、「日本哲学会」設立総会が開催され、全文17条からなる規約を制定し、初代委員長に天野貞祐を選出した。翌50年、委員長は務台理作（東京文理科大学学長）に替わった。

1950年の日本哲学会総会は、海外の哲学会宛に、次の三点を柱としたメッセージを発信している。メッセージからは、戦後からの新生を図ろうとする、並々ならぬ「日本哲学会」の決意が伝わってくる。その柱は、①ヒューマニズムの尊重、②哲学研究成果の交換、③人類文化の向上と世界平和の樹立、であった。

メッセージ前文の要旨は、次の通りである。

「“日本哲学会”に属する私ども哲学研究者は1950年の総会に臨み、全世界の哲学研究者に対して、“日本哲学会”の創立を伝え、今後の提携のために挨拶を送る。（…中略…）“日本哲学会”の創立を全世界の哲学研究者たちに報告するに当たり、私どもは次のことを訴える。

第一に、日本の哲学者の大部分は、一時ファシズム（注…強権的・独裁的・非議会主義的思想、政治体制・形態の総称）の压制下に沈黙を余儀なくされたけれども、その本来の精神においては、終始ヒューマニティ（人間性）を尊重する立場を守り続けてきたことを認めてもらいたい。第二に、研究の成

果を交換し、思想を交流して人類文化を高める事業には、私ども日本の哲学研究者も立派な役割をはたすことができるであろうことを、全世界の哲学研究者の皆さんから期待してもらいたい。第三に、私どもは現在の世界が二つに割れていることを衷心遺憾に思い、人類の幸福と世界の平和のため、健全なヒューマニティに富む思想を樹立するよう、あらゆる手段を通じ、あらゆる機会をとらえて、全世界の哲学者が協力することを要望する。

この機会に、私ども日本の哲学者は困難な戦後の状態の中であって、僅かに成就し得た業績を、貴学会を通じて貴国の哲学研究者に送る。そしてまた、私どもは貴学会を通じて、貴国哲学会の業績と情報とに接し得んことを希望する。」

このメッセージに対する海外哲学研究機関からの反応は速かった。1951年（昭和26）5月には、ベルギー国際哲学会実行委員会から、1953年8月開催の国際哲学会議への、日本代表派遣要請があった。同51年9月には、ユネスコ哲学・人文研究分科会から日本哲学会へ、「哲学教育に関する調査」の委嘱があった。

伊藤吉之助は1950年（昭和25）、日本哲学会から日本学術会議全国区委員候補者に推薦され、翌51年には、日本学術会議科学研究費等分科審議会委員に選ばれた。そして3年後の1953年、彼は日本哲学会委員長に推挙された。

1954年（昭和29）3月31日発行の日本哲学会研究誌『哲学』（3・4号合併号）に、伊藤は「哲学の学会」と題して、次のように巻頭の言葉を寄せている。

「哲学そのものは一つのイデー（Idee、観念・概念・思想・意見）であって、現実には、どこにもそのようなものがあつたためしはない。現実にある哲学といえば、それはそれぞれの哲学者の名を冠した個性的な哲学だけである。凡そ学問のうちで、哲学ほど個性的なものはないと云ってもいいであろう。だから哲学の場合には、昔の宗教会議の様に、会議が真理・教義決定の場所となるという様なことは、まず考えられないことなのである。にも拘らず、多くの他の学問と同じ様に、現在では哲学も矢張り学会をもっていると云うのは、一体どういうわけなのであろうか。

哲学の学会が自然科学の学会の成果に刺激されて、初めて出来る様になっ

たことは歴史的事実のようであるが、このような歴史事実の背後には、また或る特定の哲学理念があったことも歴史的事実である。(…中略…)

日本に初めて哲学会が結成されたのは、1884年(明治17)であった。今から満70年前(平成20年からは124年前)のことである。発足したばかりの哲学会は、自ら“村芝居”的幼稚さを十分自覚しながらも、やがて来るべき“檜舞台”を夢見ていた。そうしてこの夢の中には、また国際的“檜舞台”もあったのである(1954年2月5日、日本哲学会委員長。)

伊藤吉之助は1953年(昭和28)から1955年までの3年間、日本哲学会委員長を務めた。1955年には、核爆弾の使用並びに核実験についての論議が世界的に高まっていた。この年の7月9日、イギリスの哲学者バートランド・ラッセルとアメリカの理論物理学者アインシュタインが、核兵器の廃絶と戦争廃止のための宣言を発した。同年7月にはスイスのジュネーブで、東西緊張緩和のための米・英・仏・ソ四巨頭会談が開かれた。ちょうどこの頃、伊藤吉之助は日本哲学会委員長名で、「世界平和」と題して、1万字に達する論文を発信している。

10. 「世界平和」と Spannung (緊張)

(一) 「世界平和」

東西両陣営間の緊張緩和に関する論稿「世界平和」の要旨の一部は、次の通りである。

「……平和という声だけでもすなおに平和にそのまま受け取られないという人類の現状は、一体どうしたという事であろう。現代は人間の善意が平和を支え得るような、そんな時代ではもはや無くなったという者さえある。しかし、とにもかくにもこの様な平和の声にうながされて、或いは真実には、東西両側の原水爆軍事力の均衡という世界政治の新事態の背景にうながされて、世界の視聴を極度に集中させながら、この頃開催されたのが、レマン湖畔(スイス)のいわゆる「巨頭会談」であった。(中略)

一般に平和の願望は、従ってまた平和思想は、人類の歴史と共に古いとい
ってよいようである。これらの平和の願いは、思想としては歴史哲学の問題
に連なるものであろうが、現実としては、このように平和の願いがたえず繰
り返されているということは、その半面に人類の歴史が、いかに平和を脅か
す戦争の歴史であったかを物語るものといえるであろう。勿論、このような
平和の願望、或いは平和思想と並行して、すでに古くから戦争の価値を高く
評価する思想も、しばしば現われている。戦争はなるほど一面には民族的危
機ではあるが、しかしまた他面では、その一層高い発展の必然的な契機であ
るとか、一民族は戦争によってのみ、即ち他民族と力を競う闘争によっての
み、自らの完全な国民的能力を現実的に自覚することができるとか、永い平和
は人間を衰弱させ、戦争こそは再び真の力を呼び覚ますとか、永久平和は夢
であり、しかもそれは美しい夢とはいわれぬ、戦争は神によって設定され
た世界秩序の要素であるとか、或いはまた哲学的には、戦争の効能を説くた
めに、古代ギリシア哲学者ヘラクレイトスの「戦いは万物の母である」とい
う、あの有名な言葉をたよりに、例えばドイツのラッソーの様に、対抗はあ
らゆる生成の原因であり、力の抗争からはじめて調和が生まれて来る、戦争は
神的なものであり、世界法則であり、全自然のうちに含まれて存在しており、
戦争は雷雨のように大気を清め、神経を強め、心情をゆり動かし、英雄的な
諸徳を振興する、という様な形で繰り返されているのである。(中略)

前に述べたように、平和の思想はすでに古くからあった。「永久平和」の
思想は、これまで無数の戦争に虐げられた人類の間に、繰り返し繰り返し
現われて来た思想であったといつてよい。(…中略…)

人々が近代平和主義思想の源泉をカントの「永久平和」論に求めていること
について、カントの平和思想はフランスのサン・ピエールやラッソーの平和主義
思想を踏まえたものであると、伊藤吉之助は言及している。そして、やがて平
和を求める世界の動きは、国際連盟・国際連合となってグローバル化してきた
ことは事実であること、人々を恐怖に陥らせている第三次世界大戦は人類を絶
滅させるものであり、是が非でも阻止しなければならないと、伊藤吉之助は日
本の哲学界を代表して力説している。

(二)平和は人間の人間性の発現から

ドイツ生まれのアメリカの理論物理学者アインシュタインが、アメリカ大統領ルーズベルトに原子爆弾の製造を進言したことに原爆の源泉を求めることができるわけであるが、そのアインシュタインが、前述のように1955年(昭和30)イギリスの哲学者ラッセル等と、原子力兵器の放棄を宣言していることは、人間の人間性が、いかに矛盾を含んでいる存在であることを証明している典型的な事例であると、伊藤は説いている。

「……人間の人間性は矛盾を含んでいる。また、矛盾を含んでいればこそ、人間性なのであろう。昔から人間は中間者だと云われて来たが、中間者というのは、その内に相矛盾するもの、即ち神に向かう方向と動物に向かう方向とを含んでいるからである。人間はこの様な矛盾を包含する。人間に於いて、神への方向だけが強調されて、動物への方向が全く否定されるならば、それはもはや人間そのものではなく、神と同質のものになってしまうであろう。逆に動物への方向だけが強調されて、神への方向が全く否定されるならば、また同じ様に人間そのものではなくて、もはやそれは動物なのであろう。両者の一方ばかりで他方を失えば、何れの一方を失っても、それはもはや、人間ではないのである。人間はある時は一方に傾き、またある時は他方に傾くにしても、それぞれの一方が全く失われてしまうということは、人間が人間である限りに於いては、考え得られないことであらう。人間は、つねにこのような両方向への動揺・緊張 (spannung) のうちに生きている。そうしてこれは、単に個人的人間について云えるだけではないに、それを含んでいる社会関係の交錯に於いても、また人類全体の関係の交錯に於いても、同様に云えるであらう。世界はつねにこのような動揺・緊張の交錯の場面である。平和は、現実にはこの場面上に求めなければならない。カントのような理念としての永久平和はともかくとして、現実の平和は、ただこの人間性を含んでいる両方向の緊張の“均衡”の上に築くより外はないであらう。しかし、このような人間性のさらに背後に潜んでいる形而上学の問題は、もはやここで語る場面ではないであらう。」(「世界平和」)

世界が東西両陣営に分裂・対立する情勢の中で、日本哲学界のリーダー伊藤吉之助は、世界平和を人間の人間性の発現のもと、両方向の緊張・張り合い（*spannung*）の「均衡」の上に築くよりほかはないと、結論づけている。

伊藤吉之助哲学の特色の一つに、「哲学は根源的な緊張・*spannung*から始まる」がある。即ち物事・対象を固定したり、主観と客観とに分けたりしないで、自也が一つになった状態、自国（自己陣営）も他国（他者陣営）もない状態から思考することによって、自ずから自者他者のこと、自己陣営・他者陣営の実体が浮かび上がってきて、論点が明確になるとする説である。グローバリズム（*globalism*、汎地球主義）の魁とも考えられる、発想の一端を垣間見ることができる。

念願であった『哲学史の歴史』執筆完了もついにかなわず、伊藤吉之助は脳軟化症で倒れ、1961年（昭和36）7月7日、76歳で逝去した。勲二等を受章。酒田市議会は、伊藤吉之助・小倉金之助の歌碑を建立することを決議した。

酒田市日和山公園に、小倉金之助の歌碑と一緒に建てられた伊藤吉之助の短歌、

“秋くれば　いではの空は雲おもく　くろづむ海の　浪高ならず”

は、1946年（昭和21）秋、北海道から一時帰郷の途中、酒田の母の実家（現亀ヶ崎3丁目）に立ち寄った際に揮毫されたものである。歌碑の除幕式は、1988年（昭和63）2月27日に執り行なわれた。